
騎兵戦線「三死兵」

あと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

騎兵戦線「三死兵」

【Nコード】

N0101S

【作者名】

あると

【あらすじ】

騎兵は駆ける。

仲間を救い出すために。

草原に風が吹いた。地を這う強風は、土と草を波打たせた。星明かりが雲に隠れ、また現れた。

葉俊は太刀を捨てていた。帯びているのは短い剣が二本。その二本を壁の隙間に差し込み、楔とする。冷たい壁面に貼りつき、息を殺した。

彼は鎧も身につけていなかった。極限まで身軽な出で立ちだ。戦士の姿ではない。もちろん、馬もない。三騎兵としての自分を捨てていた。

待っていてください。

心の中で呟いた。

腕を動かした。そっと短剣を抜き、身体を引き上げ、また差し込む。ゆっくりと上っていく。彼と同じような姿の男が、他にも何人かいた。暗部の者たちだ。国家に仕える裏の人間である。葉俊は、彼らの長でもあった。

城壁の上を見張りの兵が通った。敵国である華の兵士だ。箒を掲げ、周囲を見回していたが、壁に溶け込んだ暗部たちには気づかなかった。

見張りをやり過ぎ、葉俊は音もなく城壁の上に辿り着いた。他の暗部も遅れて到達する。

葉俊は頷き、打ち合わせた手筈どおり、部下たちが散開するのを見届けた。最後に自分自身を闇に消した。

初めは疑念だった。虚報だと思った。それが真実だと思い知らされたのは、同じ三騎兵である葉俊からの知らせであった。

馬廠は馬を駆った。西の戦線からは離脱した。西と北からの両面作戦は瓦解した。北面の戦が負けたとなれば、西を攻める意味はない。馬廠が率いていた隊は、副官の馬孫に任せていた。

今、馬殿は精鋭百騎を率い、ある城を目指していた。華の兵士が駐留する城である。

「馬殿様、馬が――」

騎馬が潰れないぎりぎりのところで、草原を駆けていた。目的地が近くなったことで、気が急いでいたようだ。馬殿単騎がやや先行する形となってしまった。

「すまん」

馬が疲れを残したまま、到着する愚は避けるべきだった。

「小休止」

停止すると、即座に下馬した。馬への負担を少しでも減らすためである。白い泡のような汗を拭い、塩を舐めさせた。騎兵たちも休息する。

待っている。

馬殿は地平線の向こうを睨み付けた。

祥青は矢に白鳥の羽根を差し込んだ。鏃の重みと均衡になるように調整し、矢を作っていた。すでに馬の鞍につけた箆一杯だった。それだけでは足らず、もうひとつの箆も追加した。どれくらい必要になるかわからないからだ。

祥青にとっては、弓と矢は唯一の武器だ。いくらあっても足りないということはない。すべてを射尽くすまで、撤退はない。いや、たとえ矢がなくなっても、どこかで奪えばいい。命が尽きるまで、後ろに引く気はなかった。弓騎兵としての自尊心がそこにあった。祥青は近寄ってきた馬の鼻面を撫でた。

「あの城に紫蘭さんはいるそうだよ。三騎兵の葉俊さんからの言伝だから間違いない」

どこかで葉俊は少年の弓のことを聞いていたのだろう。まだ幼いといえども、戦力になりそうな存在は、手駒として使う必要があった。「一緒に行ってくれるかい？」

荒い鼻息が応えた。

「ありがとう」

祥青は馬の顔を抱きしめた。

「なに？」

城の中の一室で、楊然は汗に濡れた身体を拭いた。つい先ほどまで、弓を引いていた。錆び付いていた筋肉を鍛え直していたのだ。最近、弓の感覚を取り戻すことに熱中している。敵として現れた弓兵に刺激されての行動だった。

「楊延、と名乗ったのか？」

従弟の名だった。砦の守備を任されていた華国の隊長だったが、以前の戦いで、央に下ったと聞いていた。他の砦の隊長が早々に逃げ出した戦況下で、唯一、抵抗した軍であった。親類ながら天晴れと思ったが、この状況で現れた意味を考えた。

「行こう」

本物かどうか顔を見ればわかる。

楊延は部下に自国である華の旗を掲げさせていた。紫蘭と祥青に折られた旗である。今は新しい竿に旗がたなびいていた。

「楊然、久しいな」

城壁の上に現れた従兄に大声を張り上げた。

「楊延か。お前、ここで何をしている？ 央に下ったにしては、顔色が良いではないか」

皮肉混じりの言葉に、楊延は苦笑した。

「まあな。草原の民の中は居心地がよくてな。重い鎧を身につけずにすむのだからな」

皮肉には皮肉で返した。華の国が重い銀鎧を着込むようになって、本音は閉口していたのだ。

「何用だ」

楊然は憮然として言った。彼自身、銀鎧は好きではなかった。国策によるものであるため、受け入れる以外に選択肢はないのだ。

「人質の交換」

楊延はあっけらかんと言いつつ放った。

「人質だど？」

「私と私に従った兵士を、三騎兵の女と交換、だそうだ」

女騎兵が城内に知っているのを知っているのか。意外だった。諜報されたのかもしれない。つけ入れられる隙はなかったはずだが、絶対ということはない。

「なるほど」

楊然は計算した。通常取引ならば、断るところだ。身内とはいえ、たかだがひとつの砦の隊長が、名だたる三騎兵と釣り合うわけがない。有能な将の一人とさえ、等しいと言えないのだ。

だが、あのような状態の女ならば、どうだろうか。壊れた三騎兵に、価値はほとんどない。女としてしか、使い物にならないのだ。兵士たちは反対するかもしれないが、いつまでもつとは限らなかった。見切りをつける良い頃合いだった。

「よかろう」

楊然は計算を終えた。

「では、一刻の後に」

楊延はほっとした。自分の価値が低いことくらいわかっていた。この取引が成立する可能性は低かった。華の国の将が、従兄の楊然であつたことだけが、唯一の光明だったのだ。

楊延は、かつて命を救われた女騎兵を助け出せることが、心の底から嬉しかった。

葉俊は暗闇で爪を立てた。自分の身体に食い込んだ指の痛みを感じない。痛覚はどこかに忘れた。

部下はすでに待避させていた。紫蘭の生存の報を携え、自軍へと戻らせた。残っているのは彼一人だった。

葉俊は引き結んだ口を噛んだ。血の味が口腔に滲んだ。彼は、二人の自分を戦わせていた。

押し黙り、ことの成り行きを見届け、もつとも可能性の高い方策を選択する暗部の彼。

仲間のために戦い、身命を賭して守り、共に駆ける三騎兵の彼。

どちらが本当の自分であるのか。答えはすぐに出ず、苦悶の中で、紫蘭を見下ろしていた。

きつく拘束された紫蘭は腕を上げること、脚を閉じることでもできなかった。常に痛みがあった。脚や腕や背中や肩が悲鳴を上げ続けている。汚物にまみれたような臭気が絶えずあった。

髪は乱れ、寝台に貼りついていて。目は腫れ、耳の奥はじんじんと唸っていた。

身体が痛い。

吐き気がした。身体の中が別の何かで一杯だった。

恥辱。

そのような考えも失せ始めていた。

朝も、昼も、夕も、夜も、代わる代わる組み伏せられた。

屈辱。

そんな気持ちは忘却の彼方だった。

見られている。

霞む目の先に誰かの視線が見えた。よく見知った目だった気がする。

「ひどい臭いだな。女」

新しい男が覆い被さってきた。初めての兵士だった。

影が落ちてきた。

男の首も落ちてきた。

「紫蘭」

血が彼女を洗った。懐かしい臭いだった。しばしの間忘れていた戦場の臭いだ。

「お待たせて申し訳ありませんでした」

葉俊は清潔な布で、紫蘭の顔を拭いてやった。

関の声がこだました。

「何事だ」

楊然が城壁に取って返した。

「央の軍……のようです」

「あれは、三騎兵？ 謀られたか」

凄まじい勢いで城壁に迫る騎兵の軍だった。先頭を駆けるのは、馬敵だった。後方に百騎ほどの騎兵が続いていた。

「楊然様、城門が！」

内側から門が開かれようとしていた。

黒い姿の男たちが、城門の兵と戦っていた。葉俊の部下だった。長の命を聞かず、引き上げていなかったのだ。

城壁の兵士が吹き飛んだ。その身体に、青い矢羽根が突き立っていた。一人、二人と射倒されていく。

「あやつも、来たか」

楊然も弓を取り、射返した。何人かの騎兵に当たったが、矢が何倍にもなって返ってきた。すべてが青い矢羽根だった。先日の弓兵だ。たった一人でこれほどの矢を射ているのだ。正確さといま、空恐ろしいほどの技量を感じた。

「こちらも、騎兵を出せ」

敵によって開かれた城門から、銀騎兵が躍り出た。すでに黒い男たちは姿を消していた。

馬敵が率いる部隊と銀騎兵が真正面からぶつかった。銀騎兵が崩れる。馬敵の戟が力任せに銀の鎧を薙ぎ倒していた。他の騎兵も、二人が一人に対し、銀騎兵を打ち倒していた。機動力を十二分に発揮して、挟み込むように戦う。一人が牽制し、一人が死角から矛や槍を突き入れる。視界の狭い兜を被っているのは、避けることもままならなかった。

「なんということだ」

楊然は歯ぎしりした。戦いの趨勢は明らかに不利だった。

「楊然！」

従弟の声がした。

「状況が変わったようだ。取引はなしだ」

楊延はすでに旗を降ろしていた。人質交換は虚言だった。元華軍の兵士は、央の国軍に軟禁されていた。楊延だけが、抜け出していたのだ。

楊然が舌打ちして立ち上がった。そこに矢が飛来する。

「そこか」

箆に残った矢を握った。青い矢羽根の乙矢だった。矢が飛んでくる方向を見定め、弓を構えた。城壁から身を乗り出し、捜した。

馬に乗った弓兵が駆けていた。騎乗振りが以前よりは様になった少年がいた。

楊然は矢を放った。

「馬鹿な」

青い矢羽根が吹き飛んだ。

楊然が射た矢を、弓兵の射た矢が射抜いていた。青い羽根が宙を舞う。軌道をずらされた矢は、それでも弓兵に向かったが、馬が俊敏に動き、それをかわしていた。

再び飛来した矢が、楊然の肩を射抜いた。彼はその衝撃で意識を飛ばした。

さわさわと風が流れていた。

草と土の匂いに包まれ、優しくはない風が頬を叩いた。

「起きましたね」

微笑む葉俊がいた。

その隣に無言の馬厳が佇んでいた。何も言わない。言えないのだ。

「泣いているのか」

紫蘭は馬厳の目から涙が零れるのを見た。

「馬鹿言うな」

そう言って、馬厳は後ろを向いた。腰を落として座り込んだ。

「痛みますか」

「そうでもない」

自分の身体ではないみたいだった。借り物の肉体に入り込んだような感じた。高熱を発したときの感覚に似ている。そんな記憶も、遙か昔のものだったから、あやふやだった。

「痛み止めが効いてきたようです。少し休みましょう」

葉俊の口調は暗くはなかったが、真剣だった。紫蘭にもそれがわかった。

「そうしよう。片腕では、剣もろくに振れぬ」

右腕を失っていた。二の腕から肘にかけて巻かれた布に、血の痕がついていた。

「もう、国のために戦わなくてもいいんだぜ」

馬巖が低く言った。

「死んだってことにしてさ。どこか、平和なところで暮らせばいい腕だけではない。脚も、腹も傷ついていた。手当は一応されていたが、応急的なものだった。早急に医に携わる者に見せる必要があった。

「馬巖」

馬巖の手は目元を押さえていた。

「お前、引退するつもりなのか？」

「違うだろ！ お前だ、お前！」

馬巖は振り返って紫蘭を見た。目が赤かった。

「私？ 何故だ。この身でも、お前と五分には渡り合えるぞ」

紫蘭は左手の拳を握った。咳が出た。脚の間の鈍痛が続いていた。

「馬鹿なことを言うな。葉俊ならともかく、俺に勝てるわけがないだろう」

馬巖は鼻息を荒くした。

「待ってください。私が本気を出したら、二人とも命がないですよ」
葉俊はさらりと言って笑った。

「ふむ。試すか」

紫蘭は立ち上がろうとした。

「駄目だ！」

「寝ていてください」

馬蔵と葉俊が慌てて紫蘭を押さえつけた。

紫蘭は身体を硬直させた。傷だらけの顔に、今まで彼らが見たことのない表情を見てしまった。二人の男はすぐに身を引いたが、紫蘭はきつく目を閉じたままだった。

「紫蘭さん！」

騎兵が一騎近づいてきた。弓を担いだ祥青だった。

「無事ですか！」

「おい、お前はこっちだ」

馬蔵が祥青の前に立ち塞がり、それ以上近づくのを止めた。

「え、何故ですか」

「黙ってついてこい」

今の紫蘭の姿は見せたくないかった。馬蔵でさえ、心が乱されているのだ。少年にはこたえるだろう。

「死んでいれば良かったのかもな」

紫蘭は何でもないかのように振る舞っていたが、心に恐怖を湛えていた。そのようにしてしまった華の人間どもを、馬蔵は初めて憎いと思った。皆殺しにしてやりたいと考える自分に、彼は吐き気を催した。今までにない感情だったからだ。自分の中で、何かが変わった気がした。

「よい風です」

葉俊は草を引き抜き、風に散らした。草原の風は、強く激しい。あつという間に風に攫われ、見えなくなった。

葉俊は無力感に苛まれていた。三騎兵として生きてきたことで、たいていのことは打ち破れる自信があった。だが、紫蘭を救い出したのは、暗部としての葉俊だった。馬蔵ほど兵を率いる統率力もなければ、個人の力量も劣る。三騎兵の名は重い。闇に生きる。それが、本来の己ではないかと自答した。

「私は生きているのだな」

風が渦を巻き、紫蘭の身体を叩いていた。疼く痛みは生きている証だった。かつては、心地良く感じた風も、今は痛みを助長するだけだった。

地に伏せているからかもしれない。馬上で剣を抜き、駆け通せば、気持ちがいはずだ。だが、馬はどこだ。愛する馬はどこに行ってしまったのか。

「死んだのか」

馬のない自分は死んでいるのと同じだった。騎兵は、人と馬があつてこそ騎兵だ。草原を駆け巡り、敵と剣を交える存在だ。今の自分は何なのか。立ち上がることもできない騎兵は、騎兵ではない。紫蘭は拳を大地に打ちつけた。

「私は」

悔しかった。多勢に無勢であっても、戦いに負けて生き残る気はなかった。敵の捕虜になり、身体を陵辱されながら、生きていたくなかった。戦の中で死んでしまえばよいと、どれほど思っただろう。だが、救われてしまった。

「生きている」

首をもたげた。左腕の肘を立てる。葉俊が支えようとしてくるのを跳ね退けた。身体を回し、額と肘と膝で身体を持ち上げた。

一人で立たなければならぬ。戦場では、他人を頼っては生きられない。剣と馬がすべてだ。それさえあれば生きる道はある。

「騎兵として、生きる」

剣も、馬も失った。だが、必ず見つけ出す。

目眩のする頭を上に向けた。風の強さによるめき、倒れそうになるのを耐えた。

「私は、死なぬ」

紫蘭は全身で逆風を受け止め、立ち上がった。草原の匂いが心を静めてくれた。

馬と共に、草原を駆け抜きたい。今は、それだけが望みだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0101s/>

騎兵戦線「三死兵」

2011年10月8日00時16分発行